

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32720

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24330226

研究課題名(和文) 比喩的な指導言語による感覚の共有と「わざ」の学びモデルの構築

研究課題名(英文) Study on The Role of Metaphorical Languages and Shared Senses in the Teaching Process of "Waza": Toward Constructing a New Model of Learning

研究代表者

生田 久美子 (Ikuta, Kumiko)

田園調布学園大学・その他の研究科・教授

研究者番号：80212744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、4年間の研究期間を通して、「わざ」の習得を目指す領域において、比喩的な指導言語としての「わざ言語」を介して感覚が共有される過程の分析を行った。その結果、以下の3点を明らかにした。第一に、わざが習得されるメカニズム、特に比喩表現や暗黙知がもつ意義である。第二に、わざの伝承における「感覚」がもつ機能と役割である。第三に、「わざ」の習得過程における学習者及び指導者双方の変化である。以上の成果に基づき、教育理論・実践の双方における新たな学びのモデルを提示した。

研究成果の概要(英文)：In this study which lasted four years, we analyzed a process of developing interactive feelings and senses in transmitting "Waza" using "Waza-Gengo." In conclusion, we showed the following three points. Firstly, we made clear some mechanism in transmitting "Waza" from a perspective of implicit knowledge and metaphorical language. Secondly, we showed some roles and functions of "feelings and senses" in the process of transmission of "Waza." Finally, we made clear a process of transformation of both teachers and learners in the process of transmission of "Waza." Based on the discussion above, we proposed a new learning model in educational theory and practice.

研究分野：教育哲学

キーワード：わざ わざ言語 感覚の共有 身体 概念化

1. 研究開始当初の背景

これまで、学校教育、スポーツ、科学、及び芸能領域における指導に関する研究では、「言語 - 経験」という二元図式的な教育概念上の対立から、情報としての知識詰め込み型教育と、自由放任的な経験主義教育という教育実践上の対立を生み出している。

近年の「ゆとり教育」 - 「学力低下論争」もこの図式の中での振り子運動的な閉塞状況を免れていない。また、教育学、心理学、及び認知科学分野においては、人間の「暗黙知」に対する注目が長らくなされているにもかかわらず、それもまた「言語 - 経験」の二元図式の実効的な解決策とはなっていない。そのひとつの理由として、教育実践における「暗黙知」は、「体験を通して得られる言語化のできない知識」という、非常に矮小化された体験知として扱われているためである。ここには、暗黙知の重要性・必要性を認識しながらも、暗黙知は暗黙知として従来の知、すなわち学力とは異なる種類のものとして位置づけるという見方が存在する。その見方ゆえに、「暗黙知」を重視する教育においては単に「体験する」ことにのみ重要性がおかれ、従来の知を重視する教育実践においては従来の「情動的知識の量的蓄積」が求められるという問題性が存在する。こうした問題に対し、本研究代表者(生田)等の研究グループは、1987年以来、一貫して「わざ」による新しい知の在り方に関する研究を継続して行い、わざの視点から教育の諸問題について考究を進めてきた(生田久美子、1987、わざから知る、東京大学出版会)。また、北村等の研究グループは、1997年以来、スポーツ、音楽・芸術、科学、わざ領域における卓越した技能獲得過程について一連の調査を継続して行い、様々な技能場面における卓越した技能獲得過程の実態把握及びその分析作業を進めてきた(北村勝朗、2005、『卓越した技能の育成におけるコーチング統合モデ

ルの研究』、博士学位論文)。更に、本研究代表者および研究分担者は、平成20~22年度に行われた基盤研究(B)「卓越した技能の育成における『わざ』言語を用いた指導モデルの構築」(研究代表者:生田久美子)において、「わざ言語」が感覚の共有を通じた学びを導く作用があることを明らかにし、その成果を『わざ言語:感覚の共有を通しての「学び」へ』(慶應義塾大学出版会、2011年)としてまとめ出版している。

本研究は、これまでの芸能、スポーツ、音楽領域における研究を最大限取り入れながら、それを体系的にまとめ直し、わざ習得の構造化を試みることを意図している。この作業を通して、従来の教育専門領域における知識体系の研究にも大きく寄与することになると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「わざ」の習得を目指す領域において、比喩的な指導言語としての「わざ言語」を介して感覚が共有される過程の分析により、わざが習得されるメカニズムを解明すると同時に、新たな学びモデルを構築・提言することにある。

具体的な研究内容は下記の通りである。

「わざ」「指導言語」「比喩」「暗黙知」に関連する国内外の研究のレビュー

わざに関連する研究をレビューし、これまでに明らかにされた知見を整理する。

理論的枠組の検討

先行研究のレビューに基づいて、わざの習得と学びに関する作業モデルを作成する。

わざ言語体験に関する調査

わざ言語を通して教え学びが実践された体験について、インタビュー調査を実施する。

わざ言語実践に関する調査

わざ言語を通して教え学びが実践されている現場を対象とし、どのようにわざ言語が用いられ、それが学びにどのように作用するのか、行動観察とインタビューにより調査する。

わざ言語による新たな学びモデルの構築

従来の記述的・数値的な学びモデルのオルタナティブとして、わざ言語による学びモデルを提示する。

以上を通して、暗黙知の活用を必要とする教育領域における、わざ言語を通した指導モデルを構築することが本研究の最終的な目的である。

3. 研究の方法

本研究の方法は、比喩的な表現としてのわざ言語を通したわざの習得場面を対象とし、横断的・縦断的に検討し、わざの習得構造を明らかにし、わざ言語を通した教育的働きかけの体系化をはかる。

(1) 主たる分析対象

日本の伝統芸能におけるわざの習得

(歌舞伎、能、日本舞踊など)

スポーツにおけるわざの習得

(体操、サッカー、弓道など)

西洋芸術におけるわざの習得

(ダンス、声学、絵画、彫刻など)

(2) 調査・分析方法

文献調査：日本の伝統芸能、スポーツ、西洋芸術などをキーワードとする。

理論的枠組み：上述の文献調査を参考にして、わざ言語の作用を導く理論的枠組みや方法論を検討する。

準備体制の整備：対象者の選定、インタビュー内容の確定、インタビュー方法の検討、特定の対象者に対する予備調査などを実施する。

(3) 研究計画

平成 24 年度

わざ言語を通したわざの習得場面に関する内外の文献調査を行い、これまでに明らかにされてきた知見を整理すると共に、スポーツ才能開発・指導者育成に向けた理論的枠組みおよび方法論を構築する。また、わざ言語に関する横断的研究および熟達化過程に関する縦断的研究に向けた準備体制を整える。具体的には以下の手順によって次年度への研究調査準備体制を整える。

平成 25 年度

前年度で明らかになった知見や理論的背景を踏まえて、スポーツの才能開花および指導実践に関する横断的研究(異文化間比較研究)を開始する。

平成 26 年度

対象者のわざ言語実践に関する縦断的研究を行う。前年度に行ったインタビュー調査の対象者の中から特徴的にわざ言語が使用される人を抽出し、協力が得られる 10 名を対象とする。日々の当該活動の中でわざ言語がどのように実践されているのか、定期的な行動観察およびインタビュー調査により分析を行う。卓越した能力を発揮する人々がどのようにわざ言語を実践しているのか、現在進行形の形で体験の詳細について質的に分析を行う。

平成 27 年度

前年度までの研究実績をふまえて、「わざ言語」がどのように人の学びに作用するのか、またどのようにしてそうした作用が導かれるのか、どのような学びの場によって可能か、について検討し、下記の通り研究の総括を行う。

4. 研究成果

(1) 研究活動における成果

本研究では4年間を通して数十回に及ぶ国内フィールド調査、7回の国内研究会、2回の国際セミナー及び調査を研究活動として行ってきた。それらの個々の成果は、十数回を超える学会発表、学会誌における論文としての発表として世に公表してきた。

特に、2014年3月に刊行した報告書「わざ言語：思考と身体、知と教育における関係性 東洋の伝統と西洋の経験を比較して

[Waza gengo: mente, corpo, conoscenza e relazione educativa Scambi fra tradizioni d'Oriente ed esperienze innovative d'Occidente]」は、2013年11月6日にイタリアのポローニャ大学教育学部で開催された国際セミナーを中心とした内容であり、日本とイタリアのそれぞれの研究者の最新の論文を納めた意義あるものとなった。

また、2016年3月には本研究の最終成果報告書を刊行し、わざ言語及び感覚の共有、わざ言語を基盤とした新たな「わざ」の学びモデルの提示について、具体的な成果を示した。

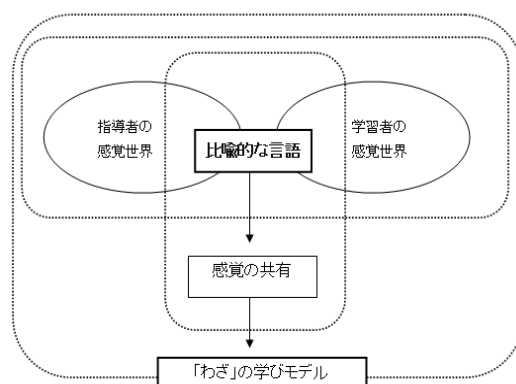
(2) 当該研究分野における成果及び意義

比喩的な指導言語である「わざ言語」という独自の視点から、学習・伝承場面に決定的な意味を持つ微妙なイメージの共有過程を研究対象とすることで、これまで解明されなかった暗黙知を関係性の中で捉え直し、学びのこつが明らかにされた。

これまで、教育現場、そして芸能・スポーツ・音楽領域の学びの場におけるわざの研究では、いかにして効率的に技能に関する情報を学習者に提供するか、という関心で研究が進められることが多かった。本研究では、単に優れた技能を発揮する人々がもつ知識や技能を整理分類するのではなく、わざ言語により微妙なイメージが伝達され、共有され、その結果わざが習得される過程を体系化した上で、実際の現場の学習者が活用可能なわざの学びの構造化が可能となった。

学習・伝承場面において、どのような場面で、どのようなわざ言語が、どのように暗黙知を関係づけ、その結果指導者、学習者双方にどのような変化をもたらすのか、といった、「わざ言語」を通じた教育的働きかけの一連の過程が体系化された。

以上の成果を図示すると下記のような



(3) 本研究の展望

本科研がテーマの主軸とする「わざ」の学びと「わざ言語」に関する知見は、上述の様々な研究活動を通して新たな局面に至った。それは、「わざ」の領域が提示するところの「言語」と「感覚」との統合であり、「感覚の共有」を基盤とした「知」の体系である。本科研が開始された当初、「感覚の共有」は、現実の「わざ」の学びの中で実際に行われている／機能している現象の名前にすぎなかった。しかしながら、本研究の結果、感覚」とは、一方で認識や知覚の一部分に還元できるほど個別なものではなく、他方で「五感」や「身体感覚」のようにひとかたまりに呼称できるほど一元化されたものでもないことが明らかとなった。それは、人間の「思考」「表象」「概念」の形成過程そのものに決定的な影響を与えると同時に、味覚・嗅覚・触覚・視覚・聴覚といった諸感官、及び身体、空間、環境、生活、習慣といった膨大な諸様式とが織りなす、極めて多様性に富んだ知的装置である。それゆえに、「感覚の共有」は「形の共有」ではなく「型の共有」をもたらし、「わざ」の学びと伝承は世界の固定ではなく更新と創造を可能にする。本研究は、以上の展望を明らかとした。

[参考文献]

- ・生田久美子・北村勝朗、『わざ言語 感覚の共有を通しての「学び」へ』、慶應義塾大学出版会、2011年
- ・Kumiko Ikuta、The Role of Craft Language in Learning Waza.Satinder P.Gill(Ed.) *Cognition, Communication and Interaction*, Spring-Verlag London Limited、405-414、2008.
- ・生田久美子、「『わざ』から『ケア』へ」、生田久美子著『「わざ」から知る』、コレクション認知科学6、東京大学出版会、2007年。
- ・Katsuro Kitamura , A Qualitative

Examination of Talent Development of Expert Scientists in Japan. Proceedings of 18th World Conference on Gifted and Talented Children. P42. 2009.

・北村勝朗、『卓越の技能の育成におけるコーチング統合モデルの研究』、博士学位論文、2005年。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7 件)

1. 生田久美子、『書評 奥井遼著『わざを生きる身体 人形遣いと稽古の臨床教育学』』、『教育哲学研究』、第 112 巻、239-245、2015 年。
2. 澤田亮、北村勝朗、『エキスパート・ポート競技者の漕艇動作を対象とした動作感覚に関する質的分析』、『教育情報学研究』第 14 巻、73-81、2015。
3. 于欣田、北村勝朗、『シンガポール在住外国人ピアノ教師を対象とした熟達化過程の質的分析』、『教育情報学研究』、第 14 巻、83-93、2015。
4. Kumiko Ikuta, "Toward the New Form of Knowledge: An Implication from Experiences in the Japanese Performing Arts," 科学研究費補助金基盤研究(B)比喩的な指導言語における感覚の共有と「わざ」の学びモデルの構築」2013 年度年次報告書、23 - 31、2014。
5. 生田久美子、北村勝朗、佐藤三昭、『わざ言語』の教育方法としての可能性は何を示唆するのか 新たな「学び」論へ向けて(日本教師学学会第 13 回大会シンポジウム 記録)』、『教師学研究』、増刷：学びを描き出し、伝える、45-63、2013。
6. 田中智志・生田久美子、『教育の共同性とは何か 近しさの基層』、『近代教育フォーラム』、第 21 号、149-159、2012。
7. 生田久美子、『教育における正義とケア 「教育の文脈」で再検討することの意義』、『教育哲学研究』、第 105 号、1-7、2012。

[学会発表](計 20 件)

1. 生田久美子、『「真」の熟達者とは何か? D. ショーンの「省察的実践家」の議論を手掛かりに』、藍野大学臨床実習指導者会議(招待講演)、2016 年 3 月 4 日。
2. 北村勝朗、生田久美子、『バスケットボールのシュート動作を対象とした感覚の可視化と言語化の試み 人型入力デバイスによる 3D デッサンを用いた動作イメージ指導に関する質的分析』、日本教師学学会第 17 回大会、2016 年 3 月 6 日、奈良学園大学。
3. 生田久美子、『感覚を通しての「知」の形成 アンテロス美術館(ポローニャ市)における「触る絵」の事例から』、前川財団第

3 回未来教育シンポジウム(招待講演) 2016 年 1 月 23 日、清澄庭園。

4. 三浦佳世、安藤花恵、中山雅雄、北村勝朗、『感性学のスポーツ心理学への応用・展開を考える』、日本スポーツ心理学会第 42 回大会シンポジウム、2015 年 11 月 22-23 日、九州共立大学。
5. 北村勝朗、澤田亮、永山貴洋、『ジュニア選手の熟達化過程における遊び体験の再定義: deliberate play(練習の要素を含む遊び体験)から deliberate practice(よく考えられた練習)への移行に焦点を当てた質的分析』、日本スポーツ心理学会第 42 回大会、2015 年 11 月 22-23 日、九州共立大学。
6. 生田久美子、『子どもを「人間としてみる」保育の創造へ 省察できる保育者とは』、田園調布学園大学大学院開設及び子ども未来学部 10 周年記念シンポジウム(招待講演) 2015 年 8 月 19 日、田園調布学園大学。
7. 尾崎博美、生田久美子、『見る・触る』から「知る・分かる」を再考する 「触る絵」が示唆する「感覚を通しての思考」に着目して』、日本教師学学会第 16 回大会、2015 年 2 月 28 日-3 月 1 日、日本女子大学。
8. 北村勝朗、鈴木大輝、中島徹、生田久美子、『高等学校ラグビー部指導における「わざ言語」の質的分析 デジタルペン(エコスマートペン)の活用実践を通して』、日本教師学学会第 16 回大会、2015 年 2 月 28 日 - 3 月 1 日、日本女子大学。
9. 生田久美子、『大学院生を伸ばす教育技術とは何か 「省察的実践家」の議論を手がかりに』、福岡県立大学大学院 F D セミナー(招待講演) 2015 年 2 月 6 日、福岡県立大学。
10. 鈴木大輝、北村勝朗、中島徹、『チームスポーツにおけるデジタルペン(SMARTMEN)の活用が練習の質に及ぼす影響』、日本教育工学会第 30 回全国大会、2014 年 9 月 1 日-9 月 2 日、岐阜大学。
11. Katsuro Kitamura, Takahiro Nagayama, "A qualitative analysis of mental model of expert junior soccer coaches in Japan," 2014 ASPASP(Asian South Pacific Association of Sport psychology), 2014 年 8 月 7 日-8 月 10 日, National Olympics Memorial Youth Center, Tokyo, Japan.
12. Katsuro Kitamura, Daiki Suzuki, Yuichiro Matsuura, "Developing coaching expertise and team cohesion in university rowing team: An action research," Congress of the

International Association of Physical Education in Higher Education(AIWSEP) 2014, 2014年2月10日-2月14日 Auckland, New Zealand.

13. Daiki Suzuki, Katsuro Kitamura, Yuichiro Matsuura, "The investigation of viewpoint movement during the snowboard varved turn," Congress of the International Association of Physical Education in Higher Education(AIWSEP) 2014, 2014年2月10日-2月14日 Auckland, New Zealand.
14. Kumiko Ikuta, "Toward the New Form of Knowledge: An Implication from Experiences in the Japanese Performing Arts," International Seminar on "Waza gengo: mente, corpo, conoscenza e relazione educative-Scambi fra tradizioni d'Oriente ed esperienze innovative d'Occidente," (招待講演) 2013年11月6日, University of Bologna, Italy.
15. 生田久美子, 「人間をケアするとは何か 教育哲学からのアプローチ」, 2013年度社会福祉法人手をつなぐ福祉会職員全体研修会 (招待講演) 2013年10月4日、テクノプラザかつしか大ホール。
16. 生田久美子, 「「知識」の新たな形式に向けて 日本の伝統芸能の事例分析が示唆すること」, ベトナムホンバン国際大学 (招待講演) 2012年11月22日、ベトナムホンバン国際大学。
17. 生田久美子, 「わざ言語と身体知教育 「わざ言語」は身体知教育へな内を示唆するか」, 上智大学公開研究会、教育イノベーション「大学における“身体知”の再構築 (招待講演) 2012年11月6日、上智大学。
18. 生田久美子, 尾崎博美, 「男女共同参画・多文化共生社会に求められる「リーダーシップ」教育の研究 - 中・高等教育における男女別学の国際比較分析に基づいて (Research on 'Leadership Education' for a Gender Equal and Multiculturally Convivial Society) 東北大学グローバルCOE 萩セミナー (招待講演) 2012年10月18日、東北大学。
19. 生田久美子, 「新たな「学び」の可能性を探る」, 『わざ言語 感覚の共有を通しての「学び」へ』における提言をめぐって」, 日本学術会議心理学・教育学委員会「身心教育を中心とした質保証のあり方検討分科会」(招待講演) 2012年9月24日、日本学術会議。
20. 生田久美子, 「「わざ言語」は何を目指すのか 感覚の共有を通しての学びへ」, 日本体育学会体育哲学専門領域シンポジウム

(招待講演) 2012年8月24日、東海大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生田 久美子 (IKUTA KUMIKO)
田園調布学園大学・大学院子ども学研究科・教授
研究者番号: 80212744

(2) 研究分担者

北村 勝朗 (KITAMURA KATSURO)
東北大学・大学院教育情報学研究部・教授
研究者番号: 50195286